



## ニュージーランド北海道酪農協力プロジェクト

### <改善策実施初年度で好結果>

ニュージーランド大使館協力の下、フォンテラジャパン株式会社とファームエイジ株式会社主導のニュージーランド北海道酪農協力プロジェクトは3年目を迎え、昨年からの改善策の実施に移りましたが、初年度から良い結果が得られたとプロジェクトコンサルタントのキース・ベタリッジ氏は述べています。

重要課題は牧草の品質を上げることです。最も大事な点は、牧草が出穂する前の40cm丈に成長するまでに放牧することです。理想的には、放牧地の平均草量（パスターカバー）は、1ha当りおよそ1500kg（DM）が望ましい。放牧後は5cm丈くらいまで食べさせるのが理想的です。柔らかい葉の牧草と白クローバーは、TDNが70-75%にはなるでしょう。

一般的な農場では放牧地の牧草を全て食べきるのに十分な搾乳牛を所有していません。しかしながら、プロジェクト協力農家は夏の放牧期間中に濃厚飼料をかなり減らしたにも拘わらず、生乳生産量に大きな変化はありませんでした。2軒は多少増え、2軒は多少減りました。当然ながら濃厚飼料の減った分、牧草の摂取量が増えています。メガファームでは、初期、中期の搾乳牛は30kgの生乳生産量が目標の為、十分な濃厚飼料、TMR、サイレージを給餌されていますが、牧草地に行けば牧草を食べています。これからも分かるように牛は牧草を好んでいるので、放牧時期は補助飼料を減らすことが出来ます。因みに4軒の協力農家の牧草給餌量は5月から10月の期間で必要な一日あたりの乾物量の45-85%の範囲でした。

伸びすぎる前に放牧をして質の良い牧草を用意します。牛は次に行く放牧地に出穂した牧草があれば、その部分は食べませんから、その部分を刈り取るトップピングを勧めます。牧草地の利用率を上げるのにはストックングレートを上げることが良い選択だと考えます。例えば、電気柵を利用して放牧範囲を制限することも有効です。今年は、乾乳牛、育成牛、子牛の放牧にも挑戦してもらいたい。放牧圧を増やすだけでなく、餌やり、牛舎の掃除などが減り、農家の作業時間も大幅に減らすことができます。牛の健康（蹄病や乳房炎）も改善されます。

高品質のサイレージは、ルーメンの健康のための粗飼料としての効用より生乳生産量の増加を促進します。ベタリッジ氏は約40cmの長さ又は2000kg（DM/ha）で牧草サイレージを刈り取れば、白クローバーが程よく混じる葉の多いTDN75%になると言っています。日本人の酪農家でも何人かは最高品質のサイレージを作っていますが、これを達成するために、夏の間に3-4回はカットしています。

2016年産の牧草とサイレージの分析結果は2015年夏のサンプルと比べてほとんど違いはありませんでしたが、牧草、サイレージ共に牛への供与した実績から品質が改善されたことが分かります。牧草は均一に、短く食され、早い再成長は緑葉を多く含み豆科の成長も良かったようです。ある協力農家が余った1カット分のサイレージを近隣の農家に譲った際、牛が好んで食べた後、自分の農場で出来た粗飼料を食べなくなったと言う話もあります。

生草でもサイレージでも TDN を 66% から 73% に上げることが出来れば、同じ生乳生産量を維持しつつ餌の量を乾物ベースで 20% 減らすことが可能です。この量を年間ベースで見ると放牧農家、舎飼い農家に拘わらず、大きな経費削減になります。

定期的なボディーコンディションの測定は、年間を通して牛群の健康状態を把握するのにとても参考になります。週に一度、牧草地の草量を測定することは、農場運営での判断に大いに参考になる作業です。ニュージーランドで成功している酪農家は、良いデータ無しでは良い決断は出来ないと述べているとベタリッジ氏は紹介しています。更に、それらの酪農家は、生乳生産量を増やすことより、利益を最大限に増やすことを目指しています。何故なら、最大限の利益を超えて生産された乳量は、それ以上に費用が掛かってしまうからです。ニュージーランドの経済学者は、生産は虚栄心を満たすが、利益は目的の現実化であると言います。これは日本の酪農家にも当てはまるのでしょうかとベタリッジ氏は聞いています。

### **本件に関するお問い合わせ先:**

フォンテラジャパン株式会社  
北海道プロジェクト担当 諏訪 茂  
電話 : 03 6737 1809 (携帯 090-6024-8930)  
Email : stan.suwa@fonterra.com